

2013年9月29日

ファイナル・メディア・コンファレンス

APRC

出席者:

| | |
|---------|------------|
| ガウラブ ギル | (チーム MRF) |
| 炭山 裕矢 | (クスコレーシング) |
| 牟田 周平 | (クスコレーシング) |

司 会： ラリー北海道の記者会見へようこそ。まずは素晴らしい成績を収められた皆さん、おめでとうございます。みなさんがポディウムの上におられるのを見るのは嬉しかったです。

さて、ギル選手から始めさせていただきます。あなたにとっては、ポディウムの一番高いところに上るのはこれが初めてではないのですが、残念ながらカウントに入るのは今回が最初ですね。とにかく、おめでとうございます。そして、今回であなたは年間チャンピオンをほぼ確実にしたわけですね。計算上ではマイケル・ヤング選手が中国で勝ってチャンピオンの座をものにする可能性もあるわけですが、可能性で言えばあなたのほうがかなり有利なわけですよ。そこで教えてください。あなたにとって選手権シリーズのここまでの感想はどうでしょう。いい時もあるれば、悪い時もありましたよね。あなたにとって、残り一戦を残した状態でのここでの勝利は、どのくらい重要なのでしょうか。

ギ ル： そうですね、今年は僕と僕のチームにとってはかなり調子がいいですね。技術的な進歩や知識については、シュコダによるフルのファクトリーサポートを得られていることがチームを前進させるのにかなり重要な役割を果たしましたし、もちろん、若くてとても速いフィンランド人のドライバーを迎えたことも、選手権にとっても僕にとってもよい方向に働きました。僕のチームメートはとても優れているので、僕はもっとプッシュすることと、年間を通じて彼と対等に競い、勝利するように挑戦することを学びました。僕らはお互いにトップタイムを奪い合いました。世界の中でもあの地域の人がここまでやって来て僕らと競い合うのは、とてもいいことです。選手権シリーズにとっても良いことです。僕らにとって選手権シリーズはここまで、特に僕にとっては、良い時も悪い時もありました。インドネシアでは2位でした。ニューカレドニアでは勝ちました。オーストラリアではリードしていたのにパンクして、そのうえサスペンションを壊してしまいました。その後マレーシアではかなりいい具合にリードしていたのにペースノート上の小さなミスからパンクにぶつけてしまい、ラジエーターを壊してしまったためにその日の残りは競技

から外れてしまいましたが、翌日にはポイントをいくらかでも取るためにラリーに復帰しました。日本でのこの週末は素晴らしいものとなりました。昨日の午前中は僕らが一番速かったのですが、午後には（路面が）かなり荒れてきたので、車を壊さないようにややペースを落としました。エサペッカは全開で踏んできました。僕らは少しペースを落として流し、順位をキープしようと考えていたのですが、競い合うことにしてステージに挑み、彼と対等のタイムを出しました。その日はその後、彼はサスペンションを壊したんだと思います。なんといっても、すでに言った通り、道はかなり荒れてましたからね。ここで経験に助けられたのはよかったと思っています。それと同時に、とても速いラップと競うこともまた良いことです。彼のタイムと競うことは良いことです。全体で見ればとてもいいラリーでしたが、不運なことに彼はこんな風にリタイアしなければならず、チームにとって、チームのマニファクチャラーポイントにとっては不運でした。ここ数年の中で僕は最高の状態にありますが、おっしゃるとおりにマイケル・ヤング選手にも、選手権チャンピオンの座を私たちから奪い取る可能性だってあります。でもそれは簡単ではありませんよ。僕らはみんなプロですし、とても良い強いチームにサポートされています。（選手権チャンピオン獲得を）やらねばなりませんし、やって見せますよ。

司 会： 今年はシュコダにとってアジアパシフィック選手権でのラリー参戦は2年目で、あなたは彼らとずっと一緒にやってきましたよね。この選手権シリーズにヨーロッパのマニファクチャラーが参戦するのはとてもいいことだと思います。しかしながら、こういう話をするには多分早すぎるんでしょうが、来年のプランについて何か知っていることや、教えてもらえることはありませんか？来年もMRFチームはシュコダと共に戦うと思いますか？

ギ ル： そうですね、そういった決断はマネジメントが行うものですね。僕はドライバーであって、僕の仕事はチームのためにできるだけ多くのポイントを稼ぐことです。まあ、シュコダにとってここに進出してくることは理に適っています。アジアは彼らの最大の市場になりつつあります。僕らは彼らにできるだけ多くの勝利を捧げ、彼らも来年また参戦する意味ができるようにすることです。そうですね。それは理に適っていますし、僕は来年も参戦することを希望しています。

司 会： ありがとうございます。あなたが勝利を取めたこのイベントについて、最後にもうひとつ伺いたいのですが。過去の年と比べて、何か違いは感じましたか。確か、あなたにとって4回目か5回目のラリー北海道でしたよね？

ギ ル： ええ、4回目です。

司 会： それなら長年使っていなかったステージを1本、今年また復活させたせいで違いを感じたということはありませんでしたか。トシ（新井（敏）選手）をはじめ何人かの選手はイベント前の記者会見で、それはいいことだとコメントしていましたし、彼は本当の意味で走ったといえる今日、

OTOFUKE を逆の方向に走るということについてわくわくするような気持ちになったようですよ。あなたにとっては、このイベント全体について、どんなふう感じたか感想を聞かせてもらえませんか。

ギル： 毎回、新しいステージを導入するのは素晴らしいアイデアだと思います。誰もそのステージを知っているとは言えないような。みんな同じ土俵で闘えるわけですからね。でも実際には僕にとってもほかの誰にとっても、それほど大きな意味はないとも言えます。世界選手権などでは、過去 25 年にもわたって使われているのに、誰も文句を言わないようなステージもありますから、文句などいふべきではないんです。ともかく、あなたの質問の要点に答えると、彼らがこの 23 キロにも及ぶステージを持っているということは素晴らしいことです。ものすごくテクニカルなステージだと思います。私が今年走り切った中でも最も難しいステージですね。とてもテクニカルで高速で、とても狭くて、とっても滑りやすいんです。ステージ自体は昨年と同じなんですけど、逆向きの走行なので、あなたの言う通り誰にとっても新しいステージとなったのです。これはかなりエキサイティングなものでした。逆走はとてもエキサイティングで高速です。実際のところ、私はとても好きですね。今回は下り坂がさらに多くなっているの、以前より高速になっているとすら言えると思います。その上、ところどころでは私はかなり速く走りました。ここ 2~3 年であんなに速く走ったことはないくらいでした。とっても楽しみましたよ。ときどき危ない場所もありました。ステージを何度も何度も走ると、道路が掘れて轍ができてしまい、車にダメージを与えるからなんですけど、昨日僕らが出していた速度であれば、ちょっと危ないということになりませんか。時速 170 キロで走っていて、こういった轍を踏み越えてドリフトすると、どこに着地することになるのかなんてわからないですからね。僕らはみんなこのスポーツをやっているわけですが、リスクはあるわけです。計算されたリスクですね。

司会： プロとして、どこに着地するのはわかるべきじゃないんですか。

ギル： だから言っているんですよ。「計算されたリスク」だってね。

司会： 炭山選手、おめでとうございます。炭山選手はこれまで何度もラリー北海道の経験があります。今回はレグ1で何台ものリタイヤが出たりもしました。今回の勝負の決め手はどこにあったと思われますか。

炭山： そうですね。路面は刻々と変化していくので、3ループ目の轍とか道が悪くなったときにリタイヤしていくような感じだったと思うので、その3ループ目の轍とか荒れたところで道からこぼれないようにできたのがよかったのかなと思っています。

司会： シーズンを通してこれまでどのような感想をお持ちですか。

炭 山： チームとしてもアジアカップということで、マレーシア、北海道、あと12月のタイという3イベントなので、マレーシアはマシントラブルでリタイヤしてしまったので、今回アジアカップの中ではポイントを取るということがあります。この次の12月のタイもなんとかいいところで終わって、まあ、牟田との勝負になるので、チームとしては多分アジアカップを取れるんじゃないかなというところで、なるべく取ればいいなと思っていますが、それは結果次第なので。

司 会： では、その牟田選手との勝負について何かフォーカスしているポイントはありますか。

炭 山： 同じチームで同じような車でやっていますので、ドライバーとコドラのクルーの闘いになります。とはいえラリーなので、リタイヤせずにいいところでフィニッシュできるように頑張りたいと思います。

司 会： 牟田選手にお聞きします。今回の順位についてはどのような感想をお持ちですか。

牟 田： アジアカップのシリーズとしては、ものすごくよくできたと思っています。ですが、総合を見ると登録選手以外の方に負けている部分があったんですね。なのでそこが僕のなかでは次に向けての課題があるのかなと思っています。

司 会： 今回のラリー北海道については、何か特別な攻略はお持ちでしたか。

牟 田： もう4回か5回出ているのですが、道がいつもよりも結構難しかったですよ。なので作戦も何もなく、とにかくタイトルのポイントの圏内にいらればと思って走っていました。

司 会： アジアカップでは、タイのイベントが残っています。それに向けては、どのような準備をされますか。

牟 田： 準備というものは何もなくて、とにかくまだ暑いでしょうからトレーニングしてしっかり走りきって、結果はわからないんですけど、取れたらいいなと思っています。

司 会： 先ほど炭山選手にもお聞きしましたが、牟田選手の炭山選手攻略は何かありますか。

牟 田： チームの大先輩ですので、本当によくしていただいているので、どっちが取るかわからないですけども、胸をお借りして頑張りたいと思います。